若者の希望が集まるまち・福島をめざして

NPO法人日本教育再興連盟（ROJE）　伊藤駿

問題意識

・東日本大震災以降発生した、「原発いじめ」「風評」の問題。

…こうした問題は「被災地の問題」として語られるが、”被災者”や”被災地”に対してそのような目線を向けるのは、被災地「外」の人間でもある。

・11年が経ち、震災や原発事故に関する話題が激減。（風化）

…震災や原発事故を忘れるのは、復興への気持ちが薄れるのは、被災者というよりも、被災地外のひとびと。

被災地の問題は、
被災地だけの問題ではない。

県内外問わず、福島の復興を取り巻く環境づくりが必要である。

これまでの取り組み

「若者が福島に関わり続ける機会を創出」

コロナ禍においても、オンライン等を駆使して継続的に実施。

1 福島の子どもたちを対象としたキャリア教育事業を実施し、県外の大学生が主体となって運営企画を行う。

子どもたちが地域内外における多様なキャリアモデルを見つける機会になるとともに、県外の大学生が福島や福島における震災の影響、福島の教育について考える機会に。

2012年～2022年まで継続的に実施。のべ600名以上の大学生が参加。
対象となった子どもはのべ300名以上。飯舘村教育委員会、南相馬市から感謝状をいただくなど、確実に県外の若者と県内の子どもたちをつなげてきた。

2 定期的に、学生をつれて、福島を訪問しフィールドワークを実施。

フィールドワークを通して福島の現状を知り、また住民の話をきいて、復興や現状に対する見方について多様な意見が存在することを学生が知る機会に。

2013年～2022年まで継続的に実施。のべ350名以上の大学生が参加。
単にフィールドワークをするだけにとどまらず、学びをまとめ、発表する機会も創出。
また、民間の助成金を獲得するなどして、**経済的に厳しい状況にある学生も、可能な限り経済負担なく参加**できるようにした。

3 福島をフィールドとした研究のコーディネートを行う。

学生の卒業論文・修士論文をはじめとして、①・②を通して得た疑問を追究したい学生について、調査・研究のコーディネートを実施している。

これまでに、15本以上の論文執筆や学会発表に関与。
自身も、学生がボランティアとして復興支援に参加することの意義などについて研究を実施。

ー 参加した学生の声 ー

フィールドワークを通して、仮設住宅での生活について話を聞いたり、地域コミュニティの大切さを感じたりしたことから、市街地の整備改善などを行う独立行政法人に勤務を希望しました。
（独立行政法人勤務）

銀行員として、福島の企業を支えたいという思いから、福島勤務を希望しました。
（銀行勤務）

「福島の現状を、さらに次の世代に伝えたい。また、現場で原発いじめを許さない。」という姿勢で教壇に立っています。
（小学校教員）

目指す未来

若者の希望が集まるまち・福島へ

将来に向けて様々な希望をもつ若者たちが集い、自らの希望を見つめ直したり、お互いに応援し合えたりする、福島にはそういった雰囲気があると強く感じています。その魅力は、さらに若者やその周囲のひとたちを惹きつけ、継続的な交流拠点になっていきます。皆の希望が溢れ、多様な人々が互いを高め合えるまちづくりに私たちも寄与していきたいと思います。